「金子氏、モリス大使と会見

日米船鉄交換同盟史（大正九年発行）より抜萃、武藤作次氏提供

第二提案又失敗に終りたるを以て今まで静かに形勢を観望し居たる金子直吉氏は心密かに期する所あり、三月十七日夜神戸より上京し翌朝停車場ホテルの一室に浅野氏、町田氏、西川氏、長崎氏、南氏等の来集を求め、氏の意中を述べて曰く、「予は密かに期する所あり、本日直ちにモリス大使に会見せんと欲す。諸君希くば此の会見を予に一任せられんことを」と、諸氏之を諾す。依て直ちに大使館に電話して会見の時刻を定め、転じて内務大臣後藤新平男に紹介状を与えられんことを乞いたるに、男は此の日陛下葉山より還幸あらせらるるに際し奉迎のため多忙なりしを以て鶴見秘書官代筆し、「金子氏は船と鉄との問題を解決するに最も適当の地位に在る人なれば特別に引見せられ其の云う所に御傾聴あらんことを乞う」との意を述べたる紹介状を与えたり。

是より先金子氏はモリス大使の閲歴及び為人を聞き其の所謂尋常一様の外交官にあらざるを知り深く之を尊敬し、多年外人相手の商談に於ける自己の経験したる所に照して、誠意を以て対すれば必ず彼れを動かし得べしとの確信を有し、一通の外国電報を懐にして上京したるなり。

偖て定刻午前十一時に米国大使館に於て両氏始めて会見したるが、モリス大使はかの紹介状に依りて多大の敬意を以て金子氏を迎え、一見直ちに旧知の如く何等城府を設けずして互に虚心淡懐の談話を交えたり。金子氏曰く、「現今日本に於て最も大なる造船能力を有し且米国政府に向って提供し得べき最も多くの船舶を有するは川崎造船所なり、而して其の社長松方幸次郎氏は現にロンドンに在りて今回の船鉄交換談に対しては頗る強硬なる意見を有し、即ち条件を是くの如く指定し来れり、と懐中より携え来れる電報を出し、而も此の指定は日本海運界の現状に照して不当の要求にあらず、然るに我々は尚も譲歩して松方氏主張の条件よりも低下して提案せる次第なり、即ち曩に逓信省を経て提案せし所と本電報とを対照せられなば予の言の虚ならざるを知りたまうべし。希くは我々の誠意を諒とせられ更に考慮せられんことを」と、右の電報を其の儘大使に提示したれば、大使は金子氏の誠意ある言辞と公明なる態度に動かされしものの如く、松方氏の電報を熟読して急に館内の下僚を呼び集め、金子氏の目前にて種々協議を凝らしたり。稍やありて大使は「遺憾乍ら米国政府の予期する所と甚だしき逕庭あるを以て如何とも為し難し」と答う。金子氏は予て今日までの経過を熟視せるに彼は我よりの提案を求めて而して毎回之を斥ぞけ来れり、斯くては何時まで繰返すも甲斐なし、又我は譲歩に譲歩を重ね往くだけづつ不利に陥るなり、如かず単刀直入彼より発案せしむるの得策なるには、而して此に導びき来らんことが抑も金子氏会見の目的たりしなり。

此に於てか金子氏形を改め曰く、「然らば事此に至っては最早絶望の外なきが如し、然れども全然施すべき途絶えたるにはあらず、川崎造所は株式会社にして松方社長以外尚川崎副社長以下の重役あり、此等の重役にして議一致せば必ずしも松方社長をして其の議に従わしめ得べからざるにはあらず、如何せん重役会に附すべき議題の未だ与えられざるを、希くは閣下より其の議に附すべき米国政府の提案を示されんことを」と。モリス大使曰く、「諾矣、早速本国政府に打電して其の回答を竢つべし、其の上更に会見の日を定めん」と。果然金子氏の目的は達したり。此の際に於るモリス氏の明敏果断は世の官僚政治家に見るを得ざる所にして、のち頭本氏事の序でにモリス氏に向って之を挙げて推称したるに氏は大いに喜びたりと。

浪華倉庫と帝人事件（一）

広岡一男

一

我々の居城鈴木商店の破綻に、私達は皆無念の血涙をのんだのであるが、以来、帝国人絹・神戸製鋼をはじめ鈴木商店直系会社の株式は、その大部分が台湾銀行の手に移った。これら多数の株式を処理するため、台銀では特に整理課を設置して、これを担当させることになった。

浪華倉庫（資本金三百万円）の全株式も台銀の手に移り、浪華倉庫は台銀の支配下に置かれることになった。

台銀では先ず、重役として岡田諭介・妹尾光太郎両氏を、経理部長として辰馬尚次郎氏を派遣し、ほかに社員数名をも出向せしめた。台銀としては当然の措置であったが、しかし私達社員としては余り好い気持はしなかった。もっとも、営業面では何等の拘束もうけなかった。私達は前途に一抹の不安をいだきながらも、一致協力して日常の仕事に励んだ。幸いに、業況も順調に推移した。

こうした状況で数年が過ぎていった。我国内外の情勢も大きく旋回しつつあった。

二

昭和六年春、私は浪華倉庫下関支店長として初めて東京丸の内の台湾銀行を訪れた。緊張に胸をドキドキさせながら、先ず整理課長越藤恒吉氏の前に立った。浪華倉庫活殺自在の権を握っている人である。加うるに、銀行マンには珍しく豪快な風丰と堂々たる貫禄に圧倒される思いであったが、私は臍下丹田に力を入れて挨拶を述べ、次いで下関支店の業況を報告した。

ところが、越藤課長の態度は意外なほど好意的で、私の報告をうなずきながら聞き終ると、

「これからも確かりやってくれ給え。」と励まされ、高木理事・柳田直吉理事・岡崎秘書課長に紹介までして下さった。私は目頭が熱くなる程嬉しかった。越藤さんは五十才前後だったろうか、私は三十三であったが、何だか学校の先輩のような親しさ、有難さを覚えた。

私は大阪本社の命で往訪したのであったが、使命を果たすことができて、本当にほっとした。

その後も、私は王子製紙・帝国製糖・昭和製糖・新竹製糖・三菱商事など在京得意先を訪問するため、毎年春秋に上京したが、その都度台銀を訪ずれ、越藤さんに会うのを楽しみに思うようにさえなった。

これは後年、島崎直幹さん（浪華倉庫専務取締役）から聞いたことであるが、当時若輩の私が下関支店長に任じられたのも、越藤・島崎両氏の話合いによったものだとのことである。

三

昭和九年の春、天下を震憾させた「帝人事件」が起り、台銀の島田頭取・高木理事・柳田理事・岡崎課長と共に越藤課長も検挙されたのである。私は大きなショックをうけた。

台銀の手によって、浪華倉庫が渋沢倉庫に買収されたのは、その直前である。

若しも「帝人事件」の起るのがもう半年も早かったら、浪華倉庫の運命は果してどうなっていたであろうか。若しまた台銀と渋沢倉庫との売買交渉が難航し、荏苒月日を経過していたら、帝人事件の勃発によってこの商談は打ち切りになったに違いない。

ところが幸か不幸か、台銀の高木理事と第一銀行副頭取で兼ねて渋沢倉庫取締役会長の明石照男氏とは非常に親しい友人の間柄であり、且つ後で詳しく述べる如く、渋沢倉庫にとっては絶好の買物だったので、両者間の折衝は極めてスムースに進捗し、昭和八年十一月に売買契約が調印されたのである。人生には誰しも「若しもあの場合……であったならば」というケースが一度や二度はあるものであるが、それは会社に於て